



日本史の面白さについて語る白駒さん

「た」と話した。また、伊能忠敬の功績を例に、日本人の労働観の美しさを強調。元々造り酒屋の婿養子だった忠敬が天文観測の道に入ったのは50歳を過ぎてからで、「当時の平均寿命を超えて新しい夢を追いかける決断をしたのは、後世

の参考となるべき地図を作りた」という志のため」と解説。「記紀神話の中での八百万(やおよろず)の神々はみな働いていて、天照大御神も機織りの仕事を持っている。日本語の『働く』は、『はた』を『楽』にするが語源で、他人を幸せにすることに喜びを感じるのが日本人。そのよ

うな価値観が、忠敬が成し遂げたような大きな仕事がある。

## “日本史の魅力”熱弁

「博多の歴史」白駒さん 170人熱心に聴講

津山モラロジー事務所での教育講演会がこのほど、大田のリージョンスンターで開かれた。「博多の歴史」として知られる、白駒妃登美さんが「人生に悩んだら日本史に聞こう」をテーマに話した。

歴史上の人物を「友人」と呼ぶ白駒さんは、「4年前に大病を患い、絶望のふちから救ってくれたのは、やはり『友人』の一人である

正岡子規だった」と語った。「子規は脊椎(せきつい)―カリエスで病床に就いたさい、どんなに苦しくても一瞬一瞬を精いっぱい生きる覚悟を決めた。そこから彼の作風は変わった」と述べ、このことから「人生に起こることは、どんなに苦しいことでも未来のため起こっており、未来に生かすことができる」と考えられるようにな

った」と話した。また、伊能忠敬の功績を例に、日本人の労働観の美しさを強調。元々造り酒屋の婿養子だった忠敬が天文観測の道に入ったのは50歳を過ぎてからで、「当時の平均寿命を超えて新しい夢を追いかける決断をしたのは、後世